

「神に称賛される私たちの生き方」

～信仰によって決断する～

ヘブル11:1～6

物事を見る基準

みなさんも映画の宣伝を見たことがあると思います。1分30秒のものか、3分にまとめられています。日本でも「タイタニック」という映画は多くの人が見て、見たことのない人がいないぐらいだったのではないかと思います。しかし、この広告を作る人は、映画の全てを見て、作っているわけではないようです。「何処を訴えるか?」「何処を伝えるか?」という映画の中身はどうでもよいわけです。映画館に行って映画を見た人は、それぞれに主観を持っていろいろな所に感動して帰ります。ですから、映画館に行かせる事、DVDを買ったり、借りさせることが広告宣伝会社のテーマとなります。また美容化粧品などの広告は、携帯の数秒の広告の中で人々の「本当にそうになったら良いな」という願いをうまく使います。いかにもその商品が安いかのように見せられ、一つでよい物を二つで〇〇〇〇円などと宣伝してきます。

ある一人の人が亡くなって天国の扉のところまで来ていました。生前、人々を騙して物を売るといふ仕事をしていたこの人は、天国と地獄の絵を見て、特別にどちらか選ぶ権利を与えられました。天国は、花畑で人々が優雅な時間を過ごす絵でした。一方、地獄の絵は、新宿歌舞伎町の様な絵で、一見、とても華々しく、皆が楽しく過ごしている様に見えました。しかし、内情は、おどろおどろしい人間の欲に満ちた世界でした。この男性は新宿歌舞伎町の絵、地獄を選びました。扉は開かれ悪魔の様な存在の二人が迎えに来ました。連れて行かれる先は、彼の想像していた場所とは全く違い、おどろおどろしさの究極の場所でした。彼は門番に「話がちがう!」と訴えましたが、「あれは、地獄のPR映像です。あなたは、同じようにして多くの人を騙してきたのに、それを見抜く事ができなかったのだ」と言われたのです。彼は、一見よく見える方を選んだため地獄に行く事になりました。

これらは、たとえ話ですが、私達が見ている物は、何が基準になっているのだろうか?という事を考えさせられます。自分自身の目の前の情報を見極めることができない。それが私達です。

癒しの証

藤井美和という関西大学の教授がいます。彼女は、新聞社に入社しエリートとして5年間そこで働きました。ある日突然手がしびれ初め、全身が麻痺して動けなくなる「ギラン・バレー症候群」にかかってしまいました。

まだ30歳台であった彼女は、エリートコースを通過して突然難病にかかり、どん底を体験しました。クリスチャンであり、一生懸命勉強し新聞記者になり、報道関係の仕事で生きた後、人々にその事を教えたいという夢を持っていました。その夢は、難病により一瞬にして閉ざされ治療の方法もないというどん底でした。

神様は、人の人生の中で大きなプロローグを示して下さる事があります。彼女は病の中で死を体験し、今まで自分が生きてきたものが信仰とは全く違うものであった事を理解しました。彼女は手記の中で、「世の中の人々は、外側を着飾り、サプリメントを飲んで自分を保とうとしている。しかし、自分の内側はどれだけ弱いもので、自分の外側だけをクリスチャンとして着飾ってきたかという事が良く分かった。」と書いています。結果、藤井先生は病気から解放され、その難病とは無縁で生きています。なぜ治ったかは分かりませんが、「ギラン・バレー症候群」の難病に指定され十数時間の間にどん底に落ち、どうにもならない状況になって初めて自分の信仰は信仰ではないという事がわかりました。

エノクという人物

ヘブル人への手紙11章は「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」というところからスタートし、旧約聖書の時代の人達が出てきます。この中にエノクという人物が出てきますが「エノクの書」という外典を書いた人物であります。正典化されていませんが、エチオピアの正教会等では非常に尊ばれています。正典化されていないにもかかわらず、このユダの手紙の中には「エノクの書」が引用されていると言われています。しかし、この「エノクの書」が

発見される前に「ユダの手紙」が書かれていると、最近の研究の中でわかってきています。書物化されていない「エノクの書」が「ユダの手紙」の中で語られているというのは、神の靈感の中で書かれたことを思わされます。ユダの手紙では、アダムから7代目のエノクと書かれ、これはノアのお爺さんにあたるエノクになります。彼は、死なずにそのまま天国へ引き上げられたという事で称賛されています。ユダの手紙の中では、終わりの時代に神に無礼を行った者たちにどのような事が起こるかが預言されています。ぶつぶつ言う事、不平を鳴らす者、自分の欲望のままに歩んだり、あなたの口が、「こうなる」と言う事が神に対する無礼になるのです。

称賛される生き方へ

義人は信仰によって生きる。アダムからエノクまでの時代に1万5千人ぐらいの家族の中で何人が義人と言われたでしょうか?

アベル、ノア、エノクの3人だけです。

私たちは、天国へは帰れると決まっていますが、今日からは賞賛される生き方へ変えていきましょう。

人は安心の為いろいろなことをやりますが、自分の安心の為にすることはほとんどがズレた判断になります。次がどの様になっていくかわかりません。神様の時の中で、任された自分をどう生きられるかです。遊女クラブは、先遣隊をその時のルールや法律に構わず匿った事で評価されました。アブラハムはイサクを捧げた事で、評価されています。

エノクは黙示録の中で2節しか出てきませんが、「従う」という名前を付けられたエノクは2度神に正しかったと言われました。

自称クリスチャンの私達が本物のクリスチャンになる時が来ています。「人がどう言おうが、私は信仰に生きる。みんなが離れていっても、やはり信仰を選ぶ」その中で、私たちは信仰に立って神様がせよといわれたものをやっていかなくてはなりません。

(ヘブル11:3)『信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。』

最後に…

私たちは、周りの情報を理解しているつもりでも、わかっていないし、自分はクリスチャンだと信仰に立っていると信じていても、それが自分の人生に当てはまっているとは限りません。

自分の心を探ってみましょう。

何かを捧げる時、神様にささげているか?

心がそこに向いているか?

賞美が神様への礼拝になっているか?

私たちの決断が絶えず不安や、目の前にある問題によって促されて変化していないか?考えていきましょう。

(ヘブル12:1～4)『こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。』

(要約者:辻総一郎)

(2021年9月5日)